

## 「船頭町」子どもの頃の思い出

高司 良 恵

(会員 佐伯市宇山区)

流れ豊かな番匠川、出船入船繁く船頭町は、その玄関口として栄え商店街は活気に満ちていた。そこには情緒、人情、伝統文化、それに伴う季節折々の行事が町内を挙げて行なわれ、その思い出は半世紀過ぎた今でも忘れることは出来ない。船頭町の思い出として今、商店を綴っているが整理して今後のステップにしたいと思っている。

史談193号 船頭町の商店(その三)(1) 城下町商家の成り立ち。(2) すっぽんたびと運動会。194号(3) 黒砂糖割り。(4) 鰻さばき。195号(5) 散髪屋さん。(6) 菊池のおばあさん。(7) 誓文払い。196号(8) 精米所。197号(9) 履物店。199号(10) くすりやさん。(11) おかしやさん。

・横丁にはクドヲ菓子くだもの店、ヒコーキ堂、現在佐野金物店駐車場の所にもあったが…浜丁の武林菓子店、

京町の武林菓子店、浜丁に西野生菓子製造。現在篠崎製菓さん以外は店を閉じてしまい現在はその跡もほとんどが駐車場、空地になっている。その中でクドヲ菓子くだもの店については、一級下に豊ちゃんがいて家も近くだったので、よく遊びに行った。横丁の角に菓子やくだもの売っていた。店を通って奥に行くとい丸いテーブルがあつて畳を敷いていたので、そこ上つて宿題やトランプなどして遊んだ。一番印象に残っているのは、当時としては大変珍しいアイスケーキの製造が始まったことだった。大きなボックス、ベルトが音をたててまわってアイスケーキは作られていた。試験管の様なガラス管ケースに味や色をつけた液を入れて凍らせて製造していた。つーんとニツケを入れた白いアイスケーキ、ピンク、コーヒー色のアイスケーキが凍るとガラス管ケースを水につけ引き抜いてアイスケーキは次から次に作られよく売れていた。ボックスのふたをあけると白い煙りの様なものが出て見とれていたものだった。クドヲのおじさんは白い被衣に高下駄を履いていた。カタカタと高下駄の音がしてアイスケーキを差入れてくれたりした。口の中で甘くとけていくアイスケーキは当時一銭ではなかった

かと記憶している。クドヲのおじさん、ふくよかでもやさしく声をかけて下さったおばさん、元氣いっぱいのお豊ちゃん、楽しかった思い出を感謝しつつ忘れる事はできない。

・ヒコーキ堂菓子店 横丁の現在橋迫米屋さんあたりにあった。間口が広くてお菓子をいっぱい陳列していた。遠足の前の晩はお菓子買いの子ども達でお店がごったがえした。十銭もらって遠足のお菓子買いに行くのは、胸が高鳴った。あれこれと思いめぐらせて買うお菓子。友達と見比べてみたり、どれにするか決心がつかなかったりしたこと、家に帰って母に見せリツクサククに入れたことなど。ボンタン飴、森永ミルクキャラメル、グリコ、タンクロー飴、スカウト：などの箱物も今はなつかしい。ヒコーキ堂も開店わずか戦争の波に押し寄せ姿を消してしまった。遠足も鍛練遠足となり辨当も「日の丸辨当」になり戦争も日に日にきびしくなってきた。子どもにとってお菓子や砂糖類は、すっかり姿を消してしまい配給になり縁遠いものとなってしまった。

・保戸島の芋飴売り 保戸島からの船の往来もあったので手拭でほうかむりをしたおばさんが天秤棒をかついで

平らなタライのようなものに芋飴を前後に担いで「芋飴はいらんかえ」と声を掛けて売り歩いてた。粉の中にレコードの様な円い形の芋飴をパンパンと叩いて割っていた。芋飴は鼈甲色べっこうでつやつやしていたが残念なことにその味はよく覚えていないがただ硬そうだったと印象に残っている。

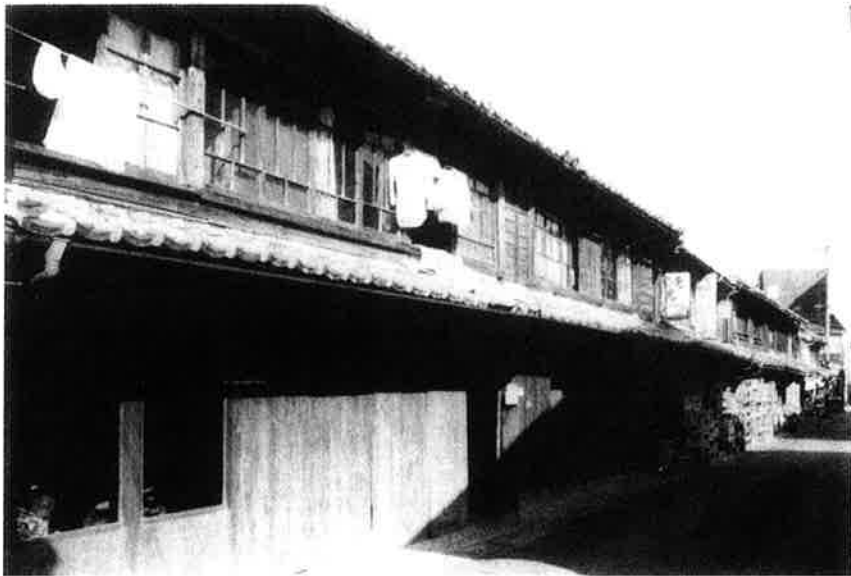
・一厘あめ 向島に魚市場があった頃その近くに年配のおじさんが一厘あめを売っていた。日曜日の朝母から一銭もらって走ってあめ買いに行つた。飴は細長く三角形で芋飴のようでもあった。粉の中に深々と埋め雑誌で作つた三角袋に一厘あめをさぐり出し掌の平でプーと粉を吹き散らして「ひとつ、ふたつ：」と十まで数えてくれた。にぎりしめた一銭を払うと無口なおじさんは笑を浮かべて「また、こいよな」といった。「一厘あめ」といわれる由来は聞いてないのでわからないがあめ一個が一厘だったから通称「一厘あめ、一厘あめ」といわれたのではないかと淡い思いを時折なつかしんでいる。今はその家もないが通る度に足を止めている。

・住吉さんの型ぬき飴やさん 住吉さん（神社）の大楠の木陰にリヤカーを改造して飴売りのおじさんが来てい

た。平らに伸ばした餛に型を入れそれを割らない様にくりぬくと次がただでもらえるという仕組で子ども心をゆさぶった。手先の器用な子はとても上手でおじさんから「ほうーうまいのうー」とほめ言葉をもらっていた。こわれたのはそのまま餛として食べた。

・紙しばいと餛　カチカチと拍子木が聞こえてくると一銭もらって住吉さんの境内に走って行つた。紙しばいがある日は決まっていた。一銭出しておじさんあげる煙草の形をした白い餛をくれた。餛を買えば紙しばいを見る事ができる。買わないと残念なことに場外で：餛をしゃぶりながら自転車荷台に作られた紙しばいを三巻ぐらいしてくれた。都堂の先代のおじさんは、とても上手でわくわくしながら見たことを覚えてる。拍子木の音、餛をしゃぶりながらの光景も今はない。

戦争が烈しくなるにつれて餛ひとつにもあつた楽しみや夢は、無惨にも破れてしまった。だが、ほんの少しの期間ではあつたが、おかしやさんのある暮らしを楽しむことが出来たことは束の間といえども幸せであつた。



並町の丁浜